
灰と共に去りぬ

ふう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰と共に去りぬ

【Nコード】

N6189A

【作者名】

ふう

【あらすじ】

こいつと一緒にいるとろくなことがない。自己中で、馬鹿な相棒。それでも共同生活してるのは、私の病気はこいつにしか癒せないからや。

出張

「腹減ったー！絶対減った。」

とか言いながらトイレで、下痢をする男がいた。私の相棒こと『野盗逃生』名字は致し方ない天の定めだとしても、名前をつけた親は…余程この子供を生むのが嫌だったのだろう。現在無職。知人なし。(うむ。実に高貴な私にふさわしい優雅な生活だ。)と本人は言っている。

「もう拾った金も残りわずか！こうなったら…へへへっ」

言いたいことは、分かる。こいつ私を食うつもりか！！

「な～んて冗談だ。」

尻も拭かずトイレから涎とその他云々を垂らしながら飛び出してきたら、誰も冗談に思えないだろう。ましてやこの男なら、当たり前前に冗談と思われる事でやりかねない。

「私はもうこの家には住めん！出ていくぞ。」

家賃1万円で、雨漏り年中無休、さらに扉さえ無いボロアパートに共同生活。はたまた食べ物もろくに食べれない暮らし。もうこの男と関わるのは、もうまっぴらだ。

「ぐははははー。何か重大な見落としをしてないかい？君？」

そうだった。私は、『この男の醸し出す雰囲気の中で毎日酒を飲まないといけない症候群』だった。私とした事がすっかり忘れていた。

「私のエンジョイ・ライフには君は欠かせないんでね！」

涎とその他云々を垂らしながら、どこに？持っていたのか…まな板で包丁を研ぐ。

目が完全に逝ってる。こいつやはりいつか食うつもりだ。

「分かったから、早くトイレに戻れ！！」

「用は、済んだがペーパーが拉致されてな。」

もう付き合いきれん……。

その時、ガラスの割れる大きな音と共に、轟く叫び声。そして、薄暗い闇の中に広がる赤い光。このアパートと道路を挟んだ向かいのアパートからだ。すぐに反応する。そして、眠った。わきめも振らず家を飛び出し、火の中に取り残された幼い少女を助け、特別な力を持つ少女を悪の巨大組織から守る云々…を期待している読者には申し訳ないが、この男は世界一の自己中で、正義感の欠片もない男なのだ。仕方ない、ここは私が行こう。

狭い路地裏を抜け、これまた狭い道路に出る。既に野次馬ができていて、私の娘が取り残されると言う言葉が耳に入る。本当だったのかと思いながら、アパートに入る。すると、火を避けながら、俊敏に入り口に向かってくる男が目に入る。どうやら少女を無事救出したようだった。

ようやく消防車、パトカー、救急車が到着する。火事も収まり、その場がようやく落ち着きを取り戻したかに見えたが……信じられないものを目にした。

「おまわりさん!!家のトイレトペーパーが拉致られたんです。そうそれは、昨日の朝方でした。いつものように、ペーパー君に話しかけてたら、いつの間にかいなくなっていたんです。それはもう水に流されるがごとく消えてしまっただけです。」

会話の内容はどうでもいいとして、相棒の姿に愕然とした。（ふつ。下何も着てないぜ、相棒。社会復帰の夢？が水に流されちゃったな）すぐに取り押さえられる相棒。なにやら相棒のギャグが聞こえるが、淡々とした警察官。

「待ってくれよ。あそこのあいつも裸だぜ。」

相棒の仲間を売る行為よりも、警察官が私を取り押さえたことに愕然とした。おいおい冗談よしてくれ。私にはこれが正装だぞ。うむを言わさず私も連れて行く警察官。ほくそえむ相棒。くそ！なんで私がこんな目に……。ここで自己紹介しよう。警察官が連行している猫―それが我輩……。私である。

営業

パトカーに、揺らされること20分、平素な警察署に到着した。相棒は、私を座布団にして眠っている。覚えていろ。

「着いたぞ！起きろ！降りろ！回れ右！」

やいのやいのうるさい警察官だ。

「今がチャンス。やい逃げろ！やれ逃げろ！」

わざわざ高らかと宣言して、警察官を振り払い、カールルスも真っ青のダッシュをみせる相棒。

「こら！待て！」

時すでに遅し、相棒は、近くの建物に入ってしまった。そう警察署内に……

署内に入ると、相棒はすでに捕まっていた。

「ふはははは。馬鹿め！『天国だと思って入った建物は、実は伏兵のいる警察署という地獄だった作戦』成功だ。」

「くそっ！なんて巧妙で奥の深い作戦なんだ。」

おそらく引っ掛かるのは相棒ぐらいだろう。

「ふっ！これまで100人中120人が引っ掛かったんだ。お前ごときに見破れるわけではない。」

「120%か？それはどうしようも無い。……………」

……………後の20人は何なんだ！」

ようやく気づいたか相棒よ。…部分の思考時間30分。カップ麺の麺は、鉄棒のごとくだぞ。

「20人は、現場にいた警察官だ。彼らも警察署だとは、思ってもみなかったようだ。」

私が思っているよりも、人間は馬鹿みたいだ。どうやってこの複雑な世の中支えられてるんだ？

簡単な手続きを済ませた後、取調べが始まった。取調室は、かなり狭く向かい合う刑事と相棒の間は、30cmぐらいしかない。刑事は、中年の小太りで、いかつい顔に無精ひげがよく似合う男だった。おそらく火事との関連性を考慮して、配属されたのだろう。

「名前は、野盗逃生。んっ…何なんだこの名前は?!自分で犯罪してますって言うてるような名前じゃないか?」

やつとまともな人間に会えたようだ。

「失礼な!!せめて、『弱きものを苛め、強きものにペコペコして生きながらえてる小悪党のようだ』と言ってくれ。」

明らかに、後者のほうがひどいが、あながち間違えじゃないな。

「まあいい。それで書類のほうになかったが、君の名前は?」

前言撤回。私に話しかけて、しゃべれると思っているのか?実際にやべれるが…。『なんでこんなところに猫がいるんだ』と言うのが筋だろう。(一応、読者諸君には教えるが私の名前は、トムである。ちなみに、ネズミを追い掛け回す趣味は持っていない。)とりあえず、すぐに解放されることを祈り、ニヤーと鳴いてみる。

「ニヤーだと?!それで、精神異常者の真似か!わしをなめるのもいいかげんにしろ。」

「こちらとて、この清潔感漂う舌で中年男をなめるのは、願い下げだ。」

思わずムツとして、口に出してしまった。ポカンとする警察官。さすがに、ほんとに猫がしゃべったから驚いたのだろう。

「うわ〜ん。おかあ〜ちゃ〜ん。猫が僕をいじめるよ〜」

いきなり金きり声をあげた刑事は、顔をクシャクシャにしながら、取調室を出て行った。私と刑事のやりとりをみて、終始笑っていた相棒が口を開く。

「あいつは精神異常者だな。」

それは、久ぶりに相棒と意見があった瞬間だった。

続・営業

続・取調室にて。相棒は、どこから持ってきたのか丼茶碗と箸の伴奏で『それゆけ カツ丼マン』のテーマ（作詞・作曲 野盗逃生）を歌っている。

「カツ丼とカツ丼だけがともだーちーさ。優しい形事サンはみんなのためにカツゝ丼を♪」

なんて変な歌詞なんだ…そして音痴なんだ。子供のために悪い。明らかに放送禁止曲だ。一方、私がノックアウトした刑事にかわり、新しくやってきた若い刑事は端整な顔をしかめている。

「君！華麗な歌を謡ってないで、ちゃんと話を聞け。そんなにカツ丼だけ食べたいなら…残念だが食事抜きだな。この警察署に用意されるのは、うな重

「うな、うな、うな重マ〜ン♪」

刑事がうな重と言ってから、歌を変えるまでに要した時間0コンマ000000000001秒。音速の常識を履がえましたよ教授。

「まあ仕方ない。腹が減っては、戦はできない。すぐに用意させよう。」

「さすがお代官様！話が分かることで…へへっ」

相棒よ饅頭…うな重もらうのは、こっちのほうが。それでは逆だ。それにしても気前がいい。禁止されてるはずだが、おそらく自白剤が入っているだろう。

「ほら！特上のうな重だ。食べな。言つとくが、自白剤なんて入っていないぞ。」

バレバレだが、流れからいって、相棒は気づかないな。まあ火事とは関係ないし、ほっといても大丈夫だろう。予想どおり一瞬で平らげる相棒。そして、ガクツとうなだれる。ほくそえむ刑事。

「では、質問だ。火事のあった時間お前は何をしていた？」

逝っちゃった目をむけながら、相棒は答える。

「トイレで用足し終えた後、トイレットペーパーが無いことに気づいたんです。それで、ペーパーを探す旅に出ようと決意して外に出たら、その…この猫がアパートに向かって、その…ゴニョゴニョ…つて。そして、私のほうにやってきて、ズボンとパンツを脱がして、その…ゴニョゴニョ…つて。」

こ、こいつ意識あるな。そうだ！こいつは『あらゆるウイルスや病原菌も逃げ出し、どんな薬も受け付けない』特異体質だったな。でもさすがに、今度こそ多少は、まともな刑事っぽいから信じないだろう。

「ふむ。なるほど！すべてが一本につながったぞ。」

突然、バックが暗くなりスポットライトが、刑事を照らす。これは、もしや…

「え〜ようやく犯人が分かりました。どうやら私は、決定的なミスをしていた様です。実に巧妙に仕掛けられたトリックでした。ヒントは猫。読者の皆様もCMの間考えて見てください。○泉でした。」

とりあえず古畑○三朗ファンの私に言わせてもらうと、今○のポジションはかなり重要であり、こんな台詞をはかれると読者の方々に変な誤解を招くのでやめてほしい。後、取調べ室のドア付近のAD兼警察官の方々（あのマザコン中年刑事以外）あーざっす。

「お前は、猫は犯罪を犯さないという心理トリックを巧妙に仕掛け、なおかつ逃生の公衆猥褻罪を誘発し、アリバイの不確定な逃生に罪が着せられるように仕向けた。」

あなたは決定的なミスをまだ犯している。

「猫のようなかわいい顔を被った偽善猫め！こうしてくれ…ふがつ…いい終える前に私は、この勘違い男に、肉球の裁きを与える。」

「うわ〜ん！お姉ちゃ〜ん！猫が苛めるよ〜う。」

今度はシスコンか！次に、まだ自白の真似を続ける相棒に、ダブル肉球の裁きを与える。

「そうなんです。この猫はほんとに、しつこくて生意気でかわいく

な ヒデブー!。」

私は一連の仕事を済ませると、ボケの連続攻撃による疲労のせいか、そのまま眠ってしまった。

休憩

気がつくと、そこは長方形に区画されたせまい密室であつた。天井からぶらさがた小さな豆電球と、何本かの鉄格子が並ぶ小窓ごしのほのかな月明かりで、部屋内はけっこう明るい。少し力びくさいのは……まあ我慢しよう。相棒の部屋のそれとは比にならない。

「なあゝトム……なんで俺らここにいるんだろうな」

相棒はベツトの上で、仰向けになつた姿勢のまま私に尋ねる。どうやら私がまだ眠っていると思つていろいろだ。それにしても相棒らしくない。例えばどんなときでもボケかますという記憶が多々あるのだが……。それにしても、うな重だけ食べたのに、臭いことといったら……質問の答えには、口臭猥褻罪がびつたりだろう。

「俺は、自分なりに考えて、自由を楽しんできたつもりだつた。馬鹿なことや、卑怯なこと、軽犯罪だつてやってきた。それらをすべて受け止めることはできる。でも、過去の自分を振り返つてみると冗談つていうものでほとんど塗りつぶされていて、自分がいったい何者なのか分からないんだ。」

そう私は気づいていた。相棒が、冗談という幻影に悩み、それでも冗談をはき続けていることを……。だからこそ私はそんな相棒を気に入る、そばにいるのだつた。

「ひとまず、お前がそんなことだとコメディ―が成り立たないから、そろそろ本調子に戻つたらどうだ。」

不器用な私には、これぐらいの言葉しか思いつかない。

「何わけの分からないこと言つてんだよ！……………」
「つておい！生きてたのか？」

ほゝう……私はいつのまにか死んだらしい。

「お前のことが憎くて憎くてな。」

「でも、全く化け猫っぽくないぜ……………つて何いいいいい……化け猫がしゃべつた。」

ほうう…猫はしゃべれるが、化け猫はしゃべれないらしい。

「おふざけは、ここまでとして、トム…生きててよかったぜ。」

こいつもようやく感謝を覚えたか。長き道のりだったな相棒よ。

「まあ助かったのは、ここの担当医イ・リョーミスのおかげだぜ。
感謝しろよ。」

……………私は本当に死んでたのかもな。

しばらくすると、月は雲に覆われ、室内は暗さを増してきた。何か嫌な予感がする。大切な何かを見落としてないだろうか？

「雲に月が覆われた時分、おまえが正体を明かす。」

まじめな顔で、相棒がおかしな発言をする。ふと気づく。さっきの月の位置からして、今は、夜の8時。……………なんてことだ。24時間30秒もの時間、持病に対する処置を行ってない……。どつと押し寄せてくる焦燥感と緊張！

「相棒、助けてくれ…。」

ここがどこか分かってるつもりだが、そついわざるをえない。顔を伏せる相棒…。

「頼む——さ、、、を……………」

私の意識はしだいに遠のいていった——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189a/>

灰と共に去りぬ

2010年12月25日02時05分発行